

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 18 回 危なくて仕方がない「フラット化」現象

昨日は、ボーイスカウト（以下、BS）のクリスマス会に参加した。無邪気に遊び回る子供たちの中には、昔の「ガキ大将」を彷彿（ほうふつ）するような、元気な子供がいた。見ているお母さん方は、正に、ハラハラ、どきどき、心配で仕方がないという顔をしている人もいた。

お母さんの心配は、良く分かる。というのは、BS の教育プログラムと、学校教育のそれとは、大きく異なっているからである。BS は、幼稚園から小学校 2 年までがビーバー隊、2～4 年までがカブスカウト、5 年以上がボーイスカウトとなるが、いずれの隊にもそれなりの階級がある。努力すればするほど増えていく技能賞、努力賞があり、実力・能力により環境が変化する、「階級プログラム」が歴然と存在する。

その点、学校教育は原点たる思想が違う。租税教育推進協議会、青少年健全育成協議会等のメンバーになっている関係上、よく、教育関係者と話し合う機会がある。

特に、小・中学校だが、今、一番生徒に人気のある先生は、「お友達感覚の先生」だそうである。先生と生徒は、ため語（友達同士で話す言葉）でしゃべり、一緒に遊び、一緒に悩んでくれる先生...こんなタイプが、人気の先生像だそうである。

一人も落ち毀れ（こぼれ）を作らず、平均偏差値のアップを目指し、決して差別せず、みんな同じに平等に、そんな教育方針が、未だに強固に根づいている。こんな現象を「フラット化」と言っている。平坦で、真っ平な教育、こんなものが、現実的なのだろうか？大量のロボット生産と、一体どこが違うのか？

必ず将来、現実社会の真っ只中へ飛び込んでいく子供たち。現実社会は、能力が平等であるわけない。競争激化の世の中で、戸惑い、迷い、苦しみながら、その解決策を見つけられなく、脱落していく若者が、どのくらいいるのか。若者たちの悲惨な叫びが、聞こえてくるようである。

「小学校の幼い時から、実力主義を教える必要はない」こんな意見が大勢を占めているようだが、しからば、一体誰が、いつ、愛する子供たちに教えてあげればいいのか？先生と生徒が平等であるはずがない。文化としての「敬語」の大切さを、就職してから企業が教えると言うのだろうか。これでは、相変わらず、子供たちが可哀想である。

BS がすべて、素晴らしいとは言わないが、将来のわが国を担う子供たちの教育、「フラット化」現象では危なくて仕方がない。親も、学校の先生も、こんな心配をしている人、例えば健全な労働力を求める経営者がいることも、是非、無視することなく、再考のひとつにして頂きたいと思っている。